

様式2

児童・生徒の実態および定期考査を含む調査結果等に基づく内容別・観点別の分析表
 教科名 (国語)

	生徒の学習状況の実態	学力調査の結果分析	内容、観点別分析
第一学年	<ul style="list-style-type: none"> ○板書や他の生徒の意見、授業での気づきや感想を書くことができる。 ○正確な表記が苦手である。 ○自分の考えを明確にもち、分かりやすく主体的に表現することが難しい生徒がいる。 ○暗唱や宿題など課題を達成できない生徒がいる。 ○漢字テストや記述力に差がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ○1学期定期考査において、漢字の表記等、基本的な国語力の低さが際立っていた。男女差も大きく、男子の課題が非常に多い。教科書の音読のテストで読めないなど、生徒の課題に合わせた特別な支援の方法の模索が課題である。 	<ul style="list-style-type: none"> ○話す・聞く：おおむね目標を達成している。 ○書く：材料を集めることはできる。正しい表記で文章化するのが困難な生徒がいる。 ○読む：おおむね目標を達成している。学校図書館を積極的に活用している。 ○言語：小学校で学習する漢字も読み書きともにできない生徒が多い。
第二学年	<ul style="list-style-type: none"> ○800字程度の文章は書ける。しかし文の成分の照応が正しくできない生徒がいる。 ○文法や伝統的な言語文化の学習を得意、好きと感じる生徒が7割以上いる。一方で演習を繰り返しても理解できない生徒もいる。 ○漢字テストや記述力に差がある。 ○授業中に意欲的に発言できない生徒がいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○「児童・生徒の学力向上を図るための調査」において、68.8%で東京都の平均73.1%を4.3%下回った。特に「話す・聞く」が7.9%と最も下回っている。今後のプレゼンテーションやパネルディスカッション等の単元、第三学年の集団討論等の単元における育成が課題である。 	<ul style="list-style-type: none"> ○話す・聞く：今後実施する予定である。 ○書く：伝えたい事柄を明確にするために、文章の構成や描写を工夫して書くことができない、または工夫することに意欲的でない生徒がいる。 ○読む：文中の根拠をもとに内容を読み取る力が不足している。 ○言語：おおむね目標を達成している。
第三学年	<ul style="list-style-type: none"> ○家庭学習、苦手な単元にも積極的に取り組む。 ○「説明文の読み方」を活用して教科書の文章を読むことができても、入試問題で活用できない生徒がいる。 ○授業中に意欲的に発言できない生徒がいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○「主として知識」では正答率77%で東京都77%と同率、全国76.1%を上回った。 ○「主として活用」では正答率64%で東京都63%、全国61.2%を上回った。 	<ul style="list-style-type: none"> ○話す・聞く：おおむね目標を達成している。 ○書く：論理の展開を工夫し、説得力のある文章を書くことができる生徒が少ない。 ○読む：学んだ「読み方」を活用した長文の読解ができない生徒がいる。 ○言語：おおむね目標を達成している。

様式2

児童・生徒の実態および定期考査を含む調査結果等に基づく内容別・観点別の分析表
 教科名 (社会)

	生徒の学習状況の実態	学力調査の結果分析	内容、観点別分析
第一学年	社会科の授業への意欲に欠ける生徒が一部みられる。その一部を除いては、ノートを取り、ワークシートをまとめ、確認の問題を解き、点検カードをまとめることはできている。問題解決学習ではグループでの話し合い学習活動はできるが、自分の言葉で要点をまとめ、発表する力はまだ不十分である。	6月の定期考査は地理的分野と歴史的分野の出題であったが、学年平均点は58点であった。観点別では、思考・表現問題は53%、資料活用問題は61%、知識理解問題は58%の正答率であった。記述式が多い思考・表現問題についての学習を強化する必要がある。また、10点未満の生徒3名への対処も必要である。	観点1：授業への意欲を社会への関心につなげる学習活動が必要である。 観点2：地図や資料から分かることをまとめる作業などを通して、思考力を伸ばす学習活動が必要である。 観点3：レポートを書く活動や、班活動で班の意見を発表する活動を増やす。 観点4：継続的に復習を積み重ねていく。
第二学年	ノートの作成やワークシート・確認プリントの取り組みは一部を除いて、おおむね真面目に取り組んでいる。基礎的な学力が不十分な生徒が見られるが、グループ学習にも慣れ、自分の意見を反映させて発表する力が徐々にではあるが身につけてきている。	都学力調査Aの正答率は本校が58.2%、都が63.3%と本校は5.1%下回った。学力調査Bの正答率は本校が45.0%、都は52.1%と7.1%下回った。AとBの合計の正答率は本校が55.4%に対し都は60.9%と5.5%下回る結果となった。	観点別では、思考・判断・表現と取り出す力と解決する力が特に低いので、今後は地図や資料から事象を読み取り、問題を取り出し、解決していく学習を強化していく必要がある。個々の基礎・基本の定着を強化するとともにグループ学習を通して読み解く力の育成を図る。
第三学年	社会的事象に対して、興味・関心をもつ生徒は増えてきている。ノートの作成やワークシート・確認プリントの取り組みは、おおむね真面目に取り組んでいる。自分の意見をまとめ、発表する力は徐々に向上してきている。他者の意見に対して、根拠(資料などの史実)をもって批判できる力を伸ばす必要がある。	区学力調査の結果は、本校平均正答率は55.9%で、区の53.4%を上回ったが全国の56.7%よりわずかに下回った。基礎の正答率も全体の結果と同じく、本校は区は上回ったが全国より下回った。活用は区を1.4%、全国を2.4%ともに上回った。	領域別正答率では地理的分野の正答率はおおむね区や全国を上回ったが、歴史的分野の近世の日本の正答率が低かった。観点別正答率はおおむね区と全国を上回ったが、特に社会的事象への関心・意欲・態度の正答率が高かった。授業ではより資料から内容を読み取り、自分の言葉でまとめていく力の育成を図る。

様式2

児童・生徒の実態および定期考査を含む調査結果等に基づく内容別・観点別の分析表
 教科名 (数学)

	生徒の学習状況の実態	学力調査の結果分析	内容、観点別分析
第一学年	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校の学習内容の理解、定着の差が大きい。(分数はもとより、小数の計算ができない生徒が多くいる。) そのため、課題や宿題への取り組みにも、個人差が目立っている。 ・授業では、多くの生徒が、まじめに学習に取り組んでいるが、基礎学力が不足している生徒もあり、意欲にも差が生じている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実施せず ・毎日の授業とテスト等から見ると、小数の計算では、加減と乗除の際の小数点の位置の理解が不十分。分数そのもの、約分、通分の理解に差がある。また、九九の習得、計算の手順(乗除優先等)の定着が不十分な生徒が多くおり、学力の層が幅広い。 	<p>約3ヶ月の授業の様子から見ると</p> <p>(内容) 分数の計算、小数の計算、速さ、割合、四則の計算の順序等で定着の弱い生徒が目立つ。</p> <p>(観点) 関心・意欲は全体的に高い。小学校での「練り上げ」をずっと経験してきたからか、提示された題材をじっくり考えたり、いろいろな見方で見ようとしたりすることはできるが、「技能」が定着していないので、答えにたどり着かなかったり、反復練習を軽視する傾向がある。知識については普通程度。</p>
第二学年	<ul style="list-style-type: none"> ・授業では、多くの生徒が、意欲を持って学習に取り組んでおり、落ち着いた環境の中で実施されている。 ・各単元の内容の難度が上がってきているので、対応できていない生徒が見受けられる。 ・家庭学習が習慣化していないので、定着も甘く、「解ける」と言う自信を持っていない生徒がいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・A教科の内容は、4観点とも、都平均を下回っていた。 ・B読み解く力は、都平均を若干上回った。特に、「解決する力」は、14 point 高かった。 ・AとBの合計の結果は、都平均より5.1 Point 下回った。 ・A層20%、B層26%、C層18%、D層36%であった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・技能について、ドリル形式の時間配分を多めに設定していく。単に「宿題」とするのではなく、授業進行の中で、解法練習とその確認をこまめに行う。 ・全般的にも、問題に挑む意欲と解ききる粘着力を意識した授業展開を進めていく。そのために例・例題も設問に準じるよう進め、解法の徹底的な確認と、反復練習をより多く配置していく。
第三学年	<ul style="list-style-type: none"> ・全般的には、最高学年としての自覚も出ており、復習にも取り組んでいる様子が見られる。 ・それぞれの進路を見据えた、学習スキルを意識しているものも増えている。 ・全体的な意欲のトーンを大切に、個別対応、全体指導を複合して、指導に当たっていく。 ・全体的に、解答後の確認を相互に取り入れ、解き切ることを伸ばす。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の調査結果より、A(主として知識)、B(主として活用)とも、都の平均より(-2 point)であった。 ・観点別では、「技能」がAで(-7 point)、Bでは(-3 point)と両方も低く、この差が都平均との差に大きく関わっている。解答に、確信が持てないときに、解ききることを躊躇する傾向があることの証左となっていると、判断する。 	<p>3学年という、中学校のまとめのとしてもあるので、各単元の内容に沿いながらの総合的な復習を加味していく。</p> <p>学力調査でも明らかになったように、「問題を解く」ことを、相互に確認し合い、相互に励まし補完する「対話的な学び」をより一層進めていく。</p>

様式2

児童・生徒の実態および定期考査を含む調査結果等に基づく内容別・観点別の分析表

教科名 (理科)

	生徒の学習状況の実態	学力調査の結果分析	内容、観点別分析
第一学年	<p>・定期考査の平均点は、58.6点であり昨年度の73.4点より14.8ポイントになった。これは指導者が替わり問題の様子が大幅に変化したものである。問題は、過去の様々な入試問題より出題したものである。授業での学習内容を理解は当然のこと多くの問題をこなしていなければ解くことが出来ない。1年生は定期テストに対して考えが甘く試験範囲内の課題のプリントをやらぬ者が多い。・男子に学習不応者が例年になく見られる。静かに机に向かうことが困難なものも複数見られる。能力的に小学生の低学年程度の者もいる。</p>	<p>定期考査の結果を考察する。</p> <p>・男子の平均点が47.4点女子の平均点が72.7点から分かるように男子はあまりにも低い。</p> <p>・問題の意味が分からない。何について聞かれているのか分からない。</p> <p>・計算の意味が分からない。どうして足すのか引くのか、かけるのか、割るのか場合によって計算の方法が変わることが不思議であるようだ。</p>	<p>授業中の様子の分析</p> <p>・授業中静かに落ち着いて学ぶ姿勢がまずは大事である。</p> <p>・日本語が分からないものや、教師の指示することの意味が分からないもの、通常の会話の意味が分からない者が複数見られる。</p> <p>・宿題をやる習慣。レポートを必ずやる習慣。分からないとき聞く習慣。など基本的な学習に対する習慣が欠如している者が男子に複数見られる。</p> <p>・女子は多くの者が真面目に取り組むことが出来る。</p>
第二学年	<p>・定期テストIの平均点は58点(昨年度65点、一昨年度56点)である。問題の難易度に差はあるが、現3年生と比較すると、学習意欲は低いと感じられる。事前の課題量は昨年より少なかったが、それでもしっかりとやる者は限られている。学習意欲が強く見られる者はあまりいない。普通学級で学ぶことが困難な生徒が複数見られる。また逆に極めて思考に切れが見られる者は確認できない。</p> <p>・授業に臨む態度等に問題点はあまり見られないが、学力がかなり低いと感じられる生徒は男子には半数近く存在する。</p>	<p>都の学力調査の結果から</p> <p>・A教科の内容は今年46.0%(昨年57.5%)で都の平均値54.3%(昨年57.2%)より8.3%も低い(昨年0.3%高い一昨年度0.9%高い)。</p> <p>・B読み解く力は今年48.3%(昨年50.7%)で都の平均値50.1%(昨年54.6%)より1.8%低い(昨年3.9%低い一昨年度4.4%高い)。</p> <p>・AとBの合計は今年46.5%(昨年56.0%)で都の平均値53.3%(昨年56.6%)より6.8%も低い(昨年0.6%低い一昨年度1.8%高い)。</p>	<p>・関心・意欲・態度は83.0%(昨年91.7%91.7%)で都平均87.6%(昨年89.0%)より4.6%(昨年2.7%)高い。思考判断表現は37.2%(昨年47.4%)で都平均46.7%(昨年度48.3%)より9.5%も(昨年度は0.9%低い)低い。技能は61.0%(昨年度81.2%)都平均61.9%(昨年度74.6%+6.6%)より0.9%低い。知識・理解は36.0%(昨年度53.7%)で都平均47.8%(昨年度は54.2%で0.5%低い)11.8%も低い。取り出す力は75.0%で都平均の79.3%より4.3%低い(昨年81.2%で都平均の78.5%より2.7%高い)。読み取る力52.0%(昨年度27.1%)で都平均の51.2%(昨年度31.61%で4.5%低い)で0.8%高い。解決する力は18.0%(昨年度43.8%)で都平均の19.9%(昨年度は53.7%で9.9%高い)より1.9%低い。解決する力は全般的にかなり低い。</p>

第三学年

・定期テストの平均点は60点(昨年度57点(一昨年度65点)であり、同じような問題であり、難易度も変わらないが昨年度より3点上昇したがこの比較にはあまり意味が無いであろう。

・週1回の探究実験の授業には大変興味を持ち積極的に参加している。昨年に引き続き同じ内容で研究するグループも有り熱意が感じられる班もあり新しい発見をしている研究もある。昨年1年間の研究の結果、実験の進め方がだいたい分かってきたようである。

全国学力調査結果 65%(都平均 65%全国平均 66.1%)

・都の学力調査の結果から教科の内容は46.0%読み解く力は48.3%合計では46.5%であった。

・全国学力状況調査の結果は平均正答率が65%(都の平均65%、全国の平均66.1%)と、全国や都と比較してもあまり差は無い。問題形式としては本校の生徒は、記述式の問題で本校56%に対して、都50.7%、全国50.1%と6%も高い結果が出ている。

観点別の正答率を見ると観察・実験の技能に関しては、本校は年間を通し35時間の探究的な実験授業をしているにもかかわらず今年は56.4%と昨年50.1%に比べ6.3%上昇したが、それでも全国67%と10.6%も低い(昨年の全国61.5%で11.4%も低い)。実験中心に生徒が主体的に協働的に実験を組み立てて1年間かけて探究しているにもかかわらず、国が望む能力とはかけ離れていることがわかる。

実験・観察の技能とは、生徒が主体的に探究をしても知識としての技能を国が求め続けている限り正答率は上がらないであろう。知識に関する問題では62%であり都の65%、全国の67.9%より少し低い。が逆に活用に関しては67%であり、都の65%、全国の64.9%と本校が2%高い。

様式2

児童・生徒の実態および定期考査を含む調査結果等に基づく内容別・観点別の分析表
 教科名 (英 語)

	生徒の学習状況の実態	学力調査の結果分析	内容、観点別分析
第一学年	多くの生徒が意欲をもち、学習に励んでいる。ビンゴや単語テストなどを通じて基礎的な単語の定着をめざしている。自己紹介など既習事項を使って、自分に関することを英語で積極的に表現している。	定期考査Ⅰに関して、総合的にみると、9割以上の得点は約30%、7割以上の得点は約20%であった。リスニングに関しては半数以上の生徒が満点であった。「表現の能力」に関する問題の得点率が低い傾向にある。	英語を聞いたり読んだりして理解する力はあるが、英文で表現する力が不足している。
第二学年	多くの生徒が授業に前向きに取り組んでいる。学習習慣が身に付いている生徒と付いていない生徒の二極化が見られる。家庭学習を習慣化することが課題である。	都学力調査の結果、都平均55.8%に対し校内平均53.8%、「教科の内容」は都平均58.9%に対し57.2%、「読み解く力」は都平均45.5%に対し42.7%であった。「関心・意欲・態度」では都平均を4.2%下回った。	英語に関する知識・理解があり、それらを使って読み解く力がある。しかし、知識を使って自分の考えを表現する力が不足している。
第三学年	多くの生徒が授業に前向きに取り組んでいるが、学習習慣が身に付いている生徒と付いていない生徒の二極化が見られる。新出事項の習得や言語活動に積極的に取り組む生徒が多く見られるが、基礎的な技能の習熟に差があり、読み解く力や表現力に差がある。	区学力調査の結果、どの項目も全国平均、区内平均ともに上回っており、特に「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」と「外国語理解の能力」の正答率が高い。	「英語表現の能力」は区内平均53.6%に対し57.0%、記問題に関しては区内平均52.9%に対して57.3%と英語を書いて表現する力が身につけてきている。

